

獵人日記



講談社

獵人日記

戸川昌子

著者略歴 東京都出身。商事会社に英文タイピストとして勤務後、アテネ・フランセで仏語を学び、のちにシャンソン歌手となる。昭和37年に「大いなる幻影」で第8回江戸川乱歩賞を受ける。「猟人日記」は受賞後、最初の書き下し長篇作品である。

現住所 東京都文京区大塚窪町5

女子アパート内

りよう じん につ き
猟 人 日 記

昭和38年 8月25日 第1刷発行 ¥ 320

著 者 と がわ まさ こ
戸 川 昌 子

東京都文京区音羽町3-19

発 行 者 野 間 省 一

東京都文京区諏訪町56

印 刷 所 株式会社常磐印刷所

発行所 東京都文京区音羽町3-19 株式 講 談 社
振 替 東 京 3930 会 社
電話東京(941) 3111(大代表)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 (藤沢製本)

© Masako Togawa 1963

目次

プロローグ	8
第一部 狩と獲物	
追うもの	23
最初の獲物	39
第二の獲物	64
第三の獲物	81
インターバル(幕間)	104

第二部 証拠の採集

弁護士

111

血液銀行

138

黒い汚点

184

エピソード

218

あとがき

装幀 田中一光／撮影 福田由也

獵
人
日
記

プ
ロ
ロ
ー
グ

何か虫の知らせとでもいうのか？
さもなければ人間が、このように
暗澹と押しかぶさる激情に包まれ
るわけがない。ただ言葉を聞いた
だけでこんなに心が乱れるわけが
ない。

―「オセロー」四幕一場―

(木下順二訳)

彼女は酒場の二階にいた。一階を見おろせる手摺のすぐそばのボックス席に、ひとりで腰をおろしていた。

そこからは入口のところに立っている白い上衣のボーイと、一階のスタンドの中でシェイカーを振っているバーテンとが見えた。それも渦巻いている煙草の煙の中にぼんやりと見えるだけだった。スタンドに向っているお客たちや、下のボックス席に坐っている連中の姿は、薄暗い酒場の空気の中に溶けてしまっていて、まるで見えなかった。

二階のスタンドではバーテンがひとり、所在なげにグラスを磨いていた。

スタンドの隅の止り木で、若い男が二人、これも顔を寄せながら何かひそひそと話し合っていた。誰も彼女に注意を払おうとしなかった。

彼女はどうみても酒場のお客にはみえなかった。お化粧らしいお化粧もしていなかったし、年も二十歳前にみえた。ただ、店に入ってから来たとき、ひどく思いつめた顔をしていた。

一階の席はどれも埋まっている様子だった。ざわめきが絶えず波のように手摺のすぐそばの彼女の足もとのところまで昇ってきては、また退いていった。

彼女の心は相変らず空虚だった。酒場の喧噪も遠のき、世界全体が真暗に感じられてしまうほど

だった。

彼女はテーブルの上のグラスに手をのぼすと、半分ほど残っていた琥珀色の液体を喉もとに流しこんだ。それは彼女が生れてはじめて味わった三杯目のウイスキーだった。口の中が熱くなり、体がさきほどよりもまた少し軽くなったような気がした。

彼女は立上ると、転ばないように気をつけてスタンドの方へ歩いていった。

バーテンが彼女の手の空のグラスを見ると、

「お早いピッチですね」

と笑いながら言った。

彼女はバーテンの笑顔に合せてにっこりと笑った。バーテンには愛想をよくしておいて損はないはずだった。この酒場を出てどこへ行く当もなかったのだから。

「ええと、三杯目でしたね。今、テーブルへお届けしますよ」

バーテンは伝票にチェックするふりをしたが、なにも書かなかった。一杯おまけするつもりなのだ。

彼女はもう一度にっこり笑うと、手摺のそばのテーブルに戻って行った。今度は前よりも少し仕合せな気がした。そんな些細なことが、彼女の今の人生にとっては一番大切なことだった。見知らぬ他人のほんのちょっとした好意——△そうだわ、あとでお返しに煙草をあげなくては……▽

バーテンが新しい受皿とカット・グラスをテーブルの上に運びウイスキーを注ぐと、足音をたてないようにして戻って行った。

彼女はまたひとりになった。そのまま目を閉じて、ゆらゆらと揺れる赤や緑の線の入り混った闇のなかに坐っていた。

さきほどまで頭の中で鳴り続けていた金属音も、うまい具合に鳴りやんだままだった。

しばらく経って、音楽がなりはじめた。それは頭の中で自然になりはじめた音なのか、外から聞こえてくる音なのか区別がつかなかったが、そんなことはどうでもよかったのだ。彼女は自分だけの世界に漂いながら、その音楽に合わせて爪先で拍子をとった。一、二、三——一、二、三——爪先を動かしているうちに、音楽がバイオリンとギターの合奏だということに気がついた。陽気なポルカだった。▲あたしの大好きだった曲だわ。あの頃は何も考えなくて幸せだったわ▼

涙が溢れはじめ、次から次へととめどなく流れてきては、頬をぬらした。その間に、ポルカがワルツになり、そしてわけのわからないリズムになった。

そんな状態が何分も続いたあとで、突然、あの一生忘れることの出来ない低音^{バース}の歌声が聞こえたのだ。その声は肉声とは思えない、まるで教会堂の中でふいに響き渡ったパイプオルガンの低音部の音のように、足もとから湧きあがり彼女の心をしっかりと囚^{とら}えてしまったのだった。

その低音^{バース}の声は、流浪の民^{バース}を歌っていた。低い、沈痛な、魂をゆさぶるような思いをこめて歌っていた。

ぶなの森の葉がくれに

うたげほがい賑わしや

たいまつ明く照らしつつ……

木の葉しきてうずいする

これぞ流浪の人の群……



酔払いのだみ声と女給たちの調子はずれのソプラノが、やはり大声でわめいていたが、彼女の耳にはその低音の声しかきこえてこなかった。

彼女はそろそろと目を開くと、おそろおそろ手摺の下をうかがった。流しが二人バイオリンとギターを弾いているほかは、誰が歌っているのか皆目わからなかった。

彼女は遠慮がちに、階下の歌声に合わせて、流浪の民々を歌いはじめた。♪流浪の民々のアルト・パートは高校の合唱部で何度も練習した得意の曲だった。彼女が歌いはじめると下の低音の歌声と調和して、美しいコーラスになった。彼女はもうやめるわけにはいかなかった。彼女が口をつぐむと、下の歌声もやんだ。彼女が歌いはじめると、下の声もそれに合せるのだった。やがて伴奏のバイオリンとギターの音がやむと、低音の歌声も聞こえなくなってしまった。誰が歌っていたのかしら——好奇心が押さえきれなくなって彼女は立ち上ると、何かの糸に操られるように階段を下りていった。

階段をおりるにしたがつて、階下の喧噪が彼女の瘦せた体を浸しはじめた。階段の下に降り立つと、彼女は二、三度目をしばたいた。一階の薄暗い照明と渦巻いている煙草の煙の中に、人々の黒い頭がいくつも重なり合つて動いていた。

流しのバイオリン弾きは楽器を小脇にかかえ、相棒と一緒に店を出て行くところだった。

あの人たちに出て行かれたら——歌声の主がわからなくなる。とっさにそう判断すると、彼女は流しの前に立ちふさがった。それから、

「おじさん、さっきの『流浪の民』をもう一度やってちょうだいな」
と言った。

「へい、何度でもやりますよ」

額の禿げあがつたバイオリン弾きは、さしだされた百円札と女の顔を交互に眺めていたが、若い相棒のギター弾きに合図をするとすぐに弾きはじめた。

すると、またあの低音の歌声がきこえたのだ。歌声の主は、彼女の立っているすぐ横のボックス席にひとりで腰をおろしていた。

彼女は体をねじ曲げるようにしてその方をうかがった。壁のほの暗い明りは、男の顔の輪郭をぼんやり浮かび上らせているだけだった。

「坐りませんか」

声をかけたのは男の方だった。彼女は言われた通り、男の横に腰をおろした。待合せの約束が交されていたかのように、ためらわずに男の横に腰をおろした。

男が流しを手招くと、同じ曲を続けるようにと注文した。それから二人で、何度も何度も『流浪の民』を繰返して合唱した。

百年の知己のように、仲好く顔を見合せて歌い続けていた。

「同じのばかり、やるな」

他の客の抗議でバイオリン弾きが困惑した仕種で弾く手を休めると、「どうしましょう、ほかのをやりましょうか」と尋ねた。彼女は一度男と顔を見合せてから、バイオリン弾きに向ってゆっくりと首を振った。

「もうやめていいわよ」

それから、男が二人分の勘定をすますと、肩をならべてその酒場を出て行った。

入口の明りで男の顔がはっきりと見えたが、彫の深い浅黒い顔立といい、渋い仕立のよい背広といい、三十近い年の頃といい、少女のようなみすばらしい連れとは、どう見ても似合の一組とはいえないかった。

*

それから数時間たったあとで、さっきの二人はタクシীর座席に体を埋めていた。

男は女の瘦せた体を長い腕で抱きかかえ、顎を女の髪の毛の中に埋めていた。

「どこか、静かにやすめるところに連れて行ってください」

男が、不愛想なタクシীর運転手に抑揚のない、いくぶん疲れた声で言った。

「ホテルですか、旅館ですか」

タクシীর運転手が乱暴に車を運転しながらきいた。

運転手と連れのやりとりを聞いているのか聞いていないのか、女は目を閉じたまま男の腕の中で少しも動こうとしなかった。

彼女は窓枠に両手でぶらさがりながら、六ヵ月前の酒場^{バー}での出会いのことを考えていた。パンプスを脱いだ裸の足の裏を、冷たい風が意地悪く撫でて行った。

あの男と寝たことは決して後悔していないわと、彼女は自分に言いきかせた。地獄のような毎日の生活の中で、あのランデブーだけが唯一の素晴らしいことだったのだ。

彼女の鼻も頬も、ビルのざらざらしたコンクリートの壁に強く押しつけられていた。小さな胸や重苦しい下腹部や足の膝にも、ざらざらしたコンクリートの感触があった。

彼女の細い腕に、またほんの少し体の重みが加わったようだった。腕が痺れて体全体の重みに耐えられなくなったとき、この七階の窓から墜落して行くだろう。あと、ほんのしばらくの辛棒——多分、二分か三分のこと。

彼女はどんなときでも、あの低い声の男がたった一度だけで永久に姿を消してしまった理由を考えないようにしていたし、まして恨みがましい気持を抱こうなどとは夢にも思っていなかった。

彼女の灰色の短かい人生に、一度だけ灯をともしてくれたのはあの男だったのだから。

▲あたしの薬指が痛みだしたのは、あのひとのせいじゃないわ。毎晩、夕方になると体の右側の半分が他人のようになってしまうのも、あのひとのせいじゃないわ。一日に何万回もキーを叩き続けてきた、それだけの理由なのだ。

あの晩から六ヵ月も余分に生きてこられたのも、あの男のお蔭だった。耳に綿をつめ、オートバイの爆音のような騒音に耐えてこられたのも、あの低い歌声が六ヵ月のあいだきこえていたからなのだ。